

困っている人に
救いの手を差し伸べたい

トップの *The president's real face* 素顔

平野グループ

代表取締役

平野 洋一 氏

vol. 11

Profile

昭和35年福井市生まれ。新潟薬科大学薬学部卒業。昭和59年第一製薬(株)入社。平成3年11月平野純薬(株)入社、専務取締役就任。平成12年(株)エイチアンドケーを設立し、代表取締役に就任。平成17年10月平野純薬(株)代表取締役、平野グループ代表に就任。福井商工会議所副会頭の他、福井経済同友会副代表幹事などの公職を務める。

DATA

創業：昭和5年
電話：0776-37-4890

本社所在地：福井市下馬2-1420
従業員：213名

普段、垣間見ることが出来ない福井商工会議所の議員の素顔を探る「トップの素顔」。今回は平野グループの代表取締役を務める平野洋一氏にお話を伺いました。

「父への反発も薬学の道へ」

昭和35年、福井市順化で薬局の長男として生まれる。店舗兼住宅の目の前は錦公園で、友人達とソフトボールを楽しんだ。順化小から明道中へと進み、高校は「第一期生として自分達の手で学校の歴史を創ることができる」と当時新設された足羽高校に進学した。

大学の進路選びには、薬学部卒の祖父と父への反発もあり、当初は文系コースを選択。だが、3年生になり薬学を志して欲しいとの父の願いを受入れ、得意科目ではない理系科目を自習し、新潟薬科大学薬学部合格。薬学の道へと進んだ。

大学ではボクシングジムに通いながら、冬には雄大な新潟の自然の中でスキーも楽しんだ。ただ、薬学の道は厳しく、3年生になると薬剤師の国家試験に向けて勉強と実習漬けの毎日を送った。この甲斐あって校内の卒業試験をパスし、見事に国家試験にも合格。晴れて薬剤師の資格を手に入れた。

神戸での出会いと帰郷

「3年間は外のメシを食べてこい」という父の言葉と東京への憧れから、就職は東京に本社を置く第一製薬(株)(現在の第一三共(株))に入社した。ところが、東京勤務は叶わず、配属されたのは大阪支店神戸営業所だった。東京に後ろ髪を引かれる中、神戸で運命の出会いが待っていた。平野氏より半年早く営業所に採用されていた現夫人と出会い、意気投合。4年余りのお付き合いを経てゴールイン。2人の子宝にも恵まれ、父の言いつけだった3年間は8年に延びた。



平野純薬(株)は1930年の創業から今年で95年を迎える。

「いい加減に帰ってこい」という父の言葉を受けて、31歳の時に家族で帰郷し、家業の平野純薬(株)に入社。専務取締役に就任したものの、就業規則や人事評価制度・賃金制度も無く、「社員達の士気の低さに啞然とした」と当時を振り返る。

何とか社員のモチベーションを上げようと、前職の労働組合での経験を生かして社内ルール整備に取り掛かった。ところが、父の信三氏からは「必要無い」と突っぱねられ、番頭役の社員との軋轢も少なくなかった。しかし、若手社員を中心に賛同の声も寄せられ、自信を深めると共に、徐々に社内の空気も変わっていったという。

医薬分業の流れをつかむ

30代の後半に差し掛かった頃、大きな転機が訪れる。その頃、国内では「医薬分業」の流れが浸透してきた。ところが、福井県には薬学を学べる大学が無く、薬剤師の有資格者も限られていた。このため県内での医薬分業の導入割合も全国最低の8%に留まっていた。

これをビジネスチャンスと捉え、平成12年にグループ会社の(株)エイチアンドケーを設立。調剤薬局の開業を県に

相談したところ、県の医薬分業推進の方針とも相まって、トントン拍子に話が進んだ。エンゼル調剤薬局の1号店を福井市堀の宮に、続いて2号店を国立あわら病院(現在の国立病院機構あわら病院)に隣接して開店。現在では福井県内に13店舗を展開し、グループ全体の約3割の売上を担う基幹事業へと成長した。

同社では事業の基盤を担う薬剤師の採用・定着を重視しており、213名の社員のうち75名を薬剤師の有資格者が占めている。本社に「ヘルプ制度」を設け、育児や介護などの急な事情で、薬局の薬剤師が出勤できなくなった場合には、本社の薬剤師がフォローに出向く仕組みを整備。こうした「休みたい時に休める」環境づくりが功を奏し、現在では同社の薬剤師の8割を女性が占めるに至っている。

ボランティアのDNA

プライベートでは、夏にはゴルフやスキューバダイビング、冬にはスキーを嗜んでいた。中でもスキューバダイビングは「海の生き物や青に染まった景色が別世界を体験させてくれる」と、その魅力をにこやかに語る。

一方で、父の信三氏がロータリーク

ラブの会員としてポリオワクチンの接種推進を目指し、世界各地を駆け回る姿を見て、社会貢献の大切さをひしひしと感じてきた。この社会貢献のDNAは社内にも浸透しており、同社では東日本大震災や能登半島地震の際に、全社員が被災地に出向き、ボランティア作業に従事。能登での支援は既に3巡目の支援に入っている。

創業から95周年を迎えるのに合わせて、今年7月には子息に代表職を譲り、これまで以上にボランティアや社会貢献活動に力を入れていく。来年には国際ロータリー第2650地区のガバナー就任も予定されている。「父のDNAを受け継ぎ、困っている人へ手を差し伸べていきたい」とさらなる将来を見据えている。



別世界を体験させてくれたスキューバダイビングの様子